

よりよい社会の実現を目指す子が育つ社会科学習

～子どもが社会とつながる授業を通して～

各務原市立那加第二小学校

1 研究主題について

(1) 今、社会科に求められるもの

平成29年3月に新しい小学校学習指導要領が告示された。今回の改定には、予測が困難な時代を迎える中、未来を生き抜く子どもたちが、質的な豊かさを伴い、持続可能な社会の担い手となることへの願いが込められている。そのために私たちは、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、仲間と共に課題の解決を目指す姿や、必要な情報を獲得し、概念的な知識を活用することで未知の状況に対応したり、困難な問題にも立ち向かったりしていくなど、よりよい社会の形成者としての力を育むことが求められている。

(2) 本校の研究の歩み

本校では、教育目標「ねばり強くやりぬく子」の具現に向け、教科、特別の教科 道徳、特別活動、総合的な学習の時間等、全ての教育活動において日々実践を積み重ねてきた。また、岐阜教育事務所指定研修校として、学校の研究主題「自ら学び、仲間と共に高め合える児童の育成」と設定し、その具現に向け、全ての教科において実践を推進してきた。

社会科においては、子どもたちが社会的事象に関心をもって学習し、課題解決に向けて資料から必要な情報を読み取ったり、見学や生活経験等の自分の知識を活用したりして考える姿が見られてきた。一方、以下のような課題も明確になってきた。

【 ●課題 →その要因】

- 出合う社会的事象に対し、その課題解決に向け見通しをもって考える姿に弱さがある。
→単元を通して、社会的事象の見方・考え方を明確にした単元の構成が甘かった。
- 学んだことを基に、他の社会的事象や自分の生活を見つめたり、それを自分ごととして関わり方を選択・判断したりする力が弱かった。
→学習内容と、他の社会的事象や子どもの生活とを結ぶ学習活動や、そのための指導援助が不十分だった。



以上の点や岐阜県小学校社会科研究部会の研究の方向を踏まえ、本校社会科の研究主題を上記のように設定した。

2 願う子どもの姿

研究主題や、これまでの実践の成果や課題を踏まえ、願う子どもの姿を次のように設定した。

- 社会的事象に関心をもち、観察・調査したり、諸資料で読み取ったりしたことを適切に表現できる子。
- 仲間と協働して考えを広げたり、深めたりし、議論することを通して、社会認識を深める子。
- 学んだことを基にして、他の社会的事象や自分の生活を見つめ、進んで社会への関わり方を考えていく子。

3 研究仮説

願う子どもの姿に迫るために、次のような研究の仮説を設定した。

教材に対して、働かせたい社会的事象の見方・考え方を明確にし、社会的事象を関連付けて多角的に考えたり、社会への関わり方を自分ごととして選択・判断したりするような、子どもが社会とつながる授業を行えば、よりよい社会の実現を目指す子が育つ。

4 研究内容

研究内容1 教材化や単元構成の工夫

- ①社会的事象を自分のこととして捉えることができる教材の開発
- ②「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成表の作成

研究内容2 学習活動の工夫

- ①社会的事象を関連付けて捉え多角的に考える学習活動
- ②社会への関わり方を選択・判断する学習活動

研究内容3 指導・援助の工夫

- ①社会とのつながりに気付く「3つの見届け」
- ②学習環境の工夫

5 研究内容及び実践

本校では、岐阜県小学校社会科研究部会の研究内容を受け、実践を進めてきた。また、上記の研究内容に対し、本校の子どもの実態と研究の方向性を考慮して、本校独自の捉えを含め実践を進めている。

研究内容 1 教材化や単元構成の工夫

①社会的事象を自分のこととして捉えることができる教材の開発

—第3学年「火事からくらしを守る」の実践—

本単元では、火事から地域の安全を守る働きについて学習する際、那加第二小学校校区にある各務原西部方面消防署と各務原市消防団の那加東部班の働きを取り上げた。

本単元では、授業時数を考慮し、「緊急時に対処する役割」又は、「関係機関の地域の人々との協力」に軽重をつけ、消防署の働きのみを教材化することが考えられる。しかしそれに加え、消防団の働きも教材化し、2つの施設や人々の働きを教材化する利点が大いと考え、以下のように整理した。

【図表-1】教材化の比較

消防署と消防団を扱うメリット
○消防団には保護者も参加しており、社会とのつながりを身近に感じやすい。
○消防団の団員不足等、社会に見られる課題を把握しやすい。
○暮らしを守る働きに対する人々の願いを直に感じ、一般化しやすい。
○子どもたち自身が消防団の方にインタビューするなど、直接取材ができる。
○消防署と消防団の相互の連携を理解しやすい。

※授業時数の確保については、総合的な学習の時間

「地域の公共施設を調べよう」と関連させ、教科横断的な学習で対応した。

消防署の働きに加え、消防団の教材化を行ったことにより、那加東部班の操法大会の様子を見せたり、消防団の方の思いを紹介したりすることを通して、身近な人たちが地域を守るために活動してくれているのだという思いが生まれ、自分との関わりを感じながら単元の学習を行うことができた。



那加東部班の活動

②「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成表の作成

—第5学年「高い土地のくらし」の実践—

以下の「図表-2」は、第5学年「高い土地のくらし」の単元構成表である。この単元構成表を作成するにあたり、特に大切にしたのは以下の3点である。

- ・既習単元「国土の地形の特色」を終えた後、子どもたちがどのような意識をもっているかを把握する。
- ・本単元で身に付けさせたい概念的知識を基に、単元学習後の子どもの意識を描き、そのために必要な単元を貫く課題を設定する。
- ・知識を関連させ、概念化させていくために、社会的事象の見方・考え方の「視点」をどのように働かせるかを明らかにする。

【図表-2】第5学年「高い土地のくらし」単元構成表

4 単元構成表 (全6時間) ○:押さえてい用語 【】:視点 ※:他学年・他教科との関わり	
単元名 高い土地のくらし -長野県川上村-	単元学習前の子どもの意識 日本の国土は、山がちで平野が少なく、海に囲まれた大小の島で構成されている。また、火山も多く、温泉は観光や休業、発電などに利用されているとわかった。自分の住む地域とは異なる場所です。人はどのようにくらしをしているのだろうか。
【第1時 川上村の地形と気候】 岐阜県各務原市と長野県川上村の地形や気候の違いを見つけてよう。 【地形】・標高1000m以上の高所にあり、もともとは火山灰が積もってできたやせた土地。 【気候】・各務原市と比べると、川上村は1年間の気温の変化が激しい。 【土地利用】・高い土地に住む川上村や南牧村のくらしや産業にはどのような工夫があるのか ○ハケ岳 ○標高 ○火山灰 ○牧場 ※4年生 特色ある地域(白川郷)	【第3時 川上村のレタス作り①】 川上村ではどのようにレタスを作っているか。 【土地利用】・長野県はレタス作りが全国一で、その内の3分の1が川上村産。 【仕組み】レタス作りには育苗や、マルチはりなど様々な仕事がある。 【願い】収穫は包丁を使っていねいに収穫。 ○土づくり ○育苗 ○マルチはり ※3年生 農家の仕事(人参づくり)
【第2時 川上村の土地改良】 川上村の人々は、どのようにして荒地を今のような土地に変えていったのだろうか。 【努力】土地を耕し、牛を飼うことでたい肥を作り、栄養のある土地に変えた。 【気候】・涼しい気候が牛の飼育に適している。 【事業】・牛乳を加工し、関東地方に運んでいる。 ○耕地 ○酪農 ○たい肥 ○火山灰	【第4時 川上村のレタス作り②(本時)】 どうして川上村では、全国で一番出荷量が多いのだろうか。 【気候】・川上村は夏でも気温が低い。レタスが育つには20度くらいが適温だから多くの県は夏以外の季節に育てる。 ・昼夜の気温差が10℃以上。 【地形】・川上村は標高1000m以上の高所にあり、夏でも涼しい。 ○高原野菜 ○産地 ○収穫
【第5時 川上村のレタス作り③】 なぜ農家の人々は、夜中の3時からレタスを収穫しているのだろうか。 【工夫】・昼間は気温が高いが、夜中は涼しく動きやすい。 【願い】・遠くまでその日のうちの新鮮なレタスを届けるため。 【仕組み】・レタスは大阪や東京、福岡まで運ばれる。 ○集荷場 ○予冷庫 ○低温輸送 ※5年 全国へ運ばれる工業製品	【第6時 これからの川上村について】 沖縄でのレタス栽培は成功するのだろうか。 【願い】・沖縄でも川上村のレタスを食べてもらいたい。 【気候】・沖縄は冬でも暖かく、レタスの生育条件に合っている。
【単元を貫く課題 高い土地に住む、川上村の人々のくらしや産業はどのような工夫があるのだろうか】	単元学習後の子どもの意識 高い土地に住む川上村の人々は、荒地を開墾し、高原野菜作りや酪農を行ったり、観光に自然の恵みを生かしたりするなど、地形の特色に合わせたくらしや産業の工夫をしていることがわかった。次は、冬でも暖かい沖縄で、どんな工夫をして生活しているのか調べてみたい。

単元学習前は、既習単元「国土の地形の特色」で日本の国土のおよその特色を捉えてきた。そのため、子どもたちは、「山地は比較的火山が多く、温泉などの観光や発電等に使われている」と認識し、およそ自分の住む地域とは異なる生活をしているだと考え

ていた。

そこで、高い土地の暮らしの事例として長野県川上村の生活を取り上げ、単元を通して働かせたい社会的事象の見方・考え方の視点を「地形」、「気候」とした。そして、単元終了後に、「高い土地等の地形に特色がある地域では、その特色に合わせた暮らしをしている」という概念的知識を身に付けさせることができるように、単元を貫く課題を設定した。

以下は、「地形」、「気候」の視点を働かせたことにより、地形条件と人々の生活を関わらせた考えをもつことができたA児のノート記述である。

【事例－1】A児のノート記述

第2時のA児のノート

川上村の人々は、高い土地だからそのよい所をりようし牛をかい手作業が良い土地をくりあげて、くろうしたと思ひました。

第4時のA児のノート

夏涼しいのや気温差が大きいのは高い土地の特色 山地の特色でいかして、有利なじゃうけんで、レタスを作っているから全国一番出荷量が少い。人気のレタスをあえて夏のおいしいとされる時期にたしめる。

第6時のA児のノート

① さく農 → 8月に観光客が② 夏でも涼しいから
② 宇宙から測り冬水じょう気③
③ 雪害を有利に → 1月に観光客②
イベントを見に来るから
山地の特色を生かしている

子どもの意識や基礎的な知識・概念を描き、社会的事象の見方・考え方の視点を明確にすることで、このA児のように、本単元で身に付けさせたい概念的知識を身に付けさせることができた。

研究内容2 学習活動の工夫

①社会的事象を関連付けて捉え多角的に考える学習活動

—第6学年「3人の武将と天下統一」の実践—

本単元では、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康がどのように天下統一を成し遂げていったのかを調べ考える学習を行った。3人の武将が行った事象の関連や意味を捉え、認識を深めることができるように、それぞれの具体的な政策のうち2点を取り上げ、その共通点を考えた。

豊臣秀吉の学習では、検地と刀狩を取り上げ、二単位時間の一時間目にはどんなことを行ったのかを具体的に調べ、二時間目には2つの政策における共通点を考える学習を行った。

【事例－2】検地と刀狩の共通点を考える話し合い

C1：検地では、正しい年貢の量が分かるので、毎年決まった年貢が手に入ります。そうすると、秀吉や役人の生活が安定します。刀狩では、一揆が起こせなくなるので、秀吉や役人は安心して楽に暮らせます。だから、どちらも秀吉や役人が豊かに暮らせるようになるためのものだと思います。

C2：C1さんとは違って、刀狩では、一揆を起こさないように武器を取り上げられた人が百姓になるから、武士と百姓の立場がはっきりとします。検地でも、検地帳に耕作者として名前が書かれた人は、百姓になるので、これも武士と農民の立場がはっきりとします。こうして、秀吉の時代が続いていくのだと思います。



C1の発言にあるように、検地と刀狩によって、政治の安定が図られたこと、また、C2の発言にあるように、兵農分離による身分統制を行ったことに気づき、秀吉の政策は、下剋上の続く戦国の世を終わらせ、全国統一を進めていくためのものだったと、認識を深めることができた。

②社会への関わり方を選択・判断する学習活動

よりよい社会の実現を目指す子を育てていくためには、子どもたちが、社会的事象の意味を多角的に追究したり、社会への関わり方を選択・判断したりする、社会とつながる授業を行うことが大切である。そのためには、教材化した社会的事象に対し、自分との関わりを常に意識しながら学習を進めていくことが必要である。

本校では、以下の【図表-3】のように、社会への関わり方を選択・判断する授業を、単元終末の1時間に位置付けるのではなく、全ての単元において複数時間で実践している。そのことで、学習対象と自分とのつながりを意識できると共に、社会を見る目を養い、社会とどのように関わっていくべきかという意識を育てていけると考えている。

【図表-3】本校が考える選択・判断の授業



単元全体を通して、自分との関わりについて考えられるようにしていくためには、単元導入時に学習内容の区分（地理・歴史・現代社会の仕組みや働き）に応じて、単元の概要（【図表-3】の①～③）に出合わせる必要がある。そのことにより、社会的事象の仕組みや働きを学びながら、社会との関わり方を選択・判断していく授業を構成できると考える。



よりよい社会の実現を目指す子を育てていくためには、子どもたちが、社会的事象の意味を多角的に追究したり、社会への関わり方を選択・判断したりする、社会とつながる授業を行うことが大切である。そのためには、教材化した社会的事象に対し、自分との関わりを常に意識しながら学習を進めていくことが必要である。

STEP	方法	教師の発問（課題）の具体例
1	授業の中で、自分との関わりや状況について知る。	【第4学年 ごみのしよ理と利用】 「各務原市のごみの量が増えているけど本当に多いのか、自分のごみを確かめよう。」
2	得た認識をもとに①地図、②年表で確認する。③自分の生活等を見つめ直す。	【第6学年 世界に歩み出した日本】 「大久保が果たした廃藩置県の願いは、年表にある他の出来事にも表れているかな。」
3	自分にできることや、よりよい発展について考える。	【第3学年 じこやじけんがおきたら】 「校区の事故を減らすために、私たちにできることはなんだろう。」

—第6学年「3人の武将と天下統一」の実践—

■STEP2の選択・判断の授業

本時は、【事例-2】の授業の後半である。本時に学習した、秀吉の「政権を安定させたい」という願いをつかみ、年表を見つめ直した。以下の【事例-3】は、STEP2の選択・判断する場面である。

【事例-3】STEP2の選択・判断の授業

子どもたちが授業で考えた秀吉の願い

「政権を安定させることによって、下剋上の続く戦国の世を終わらせ、世の中を安定させたい」

T : (単元導入で示した年表を示しながら)、この年表を見てみよう。秀吉が行ったことで、政権が安定したのかな。

C1 : 秀吉は、その後に朝鮮を侵略しています。朝鮮に税が送れるくらい、豊かになっているということだから、政権が安定したと言えます。

C2 : 1回目の朝鮮攻めと、2回目の朝鮮攻めは5年間も開いています。5年後にまた攻めることができるということは、その間は、政権が安定したんじゃないかと思います。

※歴史の授業では、社会に見られる課題について扱うことはできない。しかし、得た社会認識を基に、地図や年表等で他の社会的事象を見つめることを繰り返すことで、社会を見る目が養われ、社会との関わり方を選択・判断していくベースとなると考えている。

—第5学年「わたしたちの生活と食料生産」の実践—

■STEP3の選択・判断の授業

本単元では、稲作について学習する際、県内で農業を営む「F営農」を取り上げた。単元終末の時間で、『これからの稲作農家が発展していくためには、「A：品質の高い家庭用米」か「B：多くとれる業

務用米」どちらのお米を作るとよいのだろう」と学習課題を設定した。そして、充実した話し合いができるように、次の2点に留意した。

- ①本時の授業のアウトラインを描くこと
- ②話し合いを焦点化し、方向性を決めること

①授業のアウトラインを描く

本単元では、F 営農の学習を中心として、機械化による大量生産や様々な工夫による安心安全な米作りを行っていること等、日本の稲作に関わる現状を学んできた。稲作農家の発展について、F 営農の学習を根拠として考えられるよう、アウトラインを描いた。

【事例-4】アウトラインの描きによって生まれた発言

C1：お米を消費する国ランキングで、日本は50位になっていて①、これ以上食べなくなったら最下位になってしまうかもしれません。私は日本の食べ物といえばご飯だと思うのに、もし最下位になったら発展していない感じがするので、Aがいいと思います。

C2：C1さんの意見を聞いて自分の意見が変わりました。F 営農の取組のように家庭用米でつくったおにぎりを売って食べても



らったり、ハツシモをインターネットで売ったりして②、お米の良さをいろんな人に知ってもらって、お米を食べる人が増えていった方がいいから、Aに力をいれたいと思います。

C1①やC2②は前時までに学習した内容を踏まえた発言である。このように、多くの児童が既習事項を生かして考え、稲作農家の発展について具体的に自分の考えを述べる事ができた。

②話し合いを焦点化し、方向性を決める

また、児童が選択・判断したことを発表し合って終わるだけにならないように教師が話し合いを焦点化し、方向性を示していく必要がある。このことで、子どもたちは新たな学びに気付いたり、課題の解決に向けて自分の意見や考えをまとめやすくなりすることができる。

本時の授業では、【事例-5】のように、生産者の立場から消費者の立場へ視点を変えることで、両者の立場から考えることができ、稲作農家の発展について考えを深める事ができた。

発問前は「F 営農が発展していくためには…」という、F 営農を中心とした生産者の立場で話し合いが進んだ。そこで、教師が下線③のような発問を行ったことで、消費者の立場で考える事ができた。

このように、子どもたちは話し合いの中で、生産に関わる今日的課題の解決のための考えを深めるとともに、生産者の立場だけでなく、消費者が求めるものを作っていく必要があるということに気付く事ができた。

【事例-5】様々な立場から考えるための教師の発問

T：今までF 営農が発展していくために話し合ってきたけど、F 営農みたいな農家をはじめとする日本の農業が発展していくためには、結局何が大切なのかな？③周りの人と話し合ってみましょう。

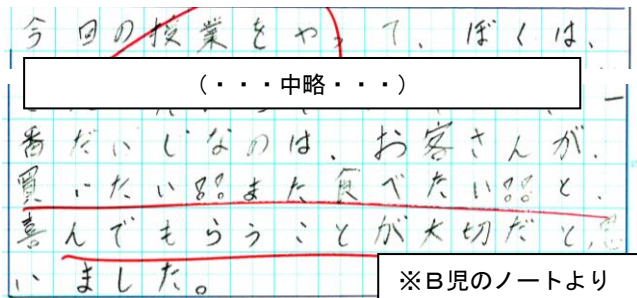
～グループ別話し合い～

C3：農業で働く人はだんだん減ってきていますよね。農業で働く人が増えるためには、お米の良さやお米作りに興味をもってもらうことが大事だと思うので、そのためにはお客さんに「食べたい」と思ってもらうことが大切だと思います。

T：今のC3の意見についてみんなはどう思った？

C4：たしかにお客さんが食べたいと思わないと、お米を買ってくれないよ。

【事例-6】立場を変える考えをもったB児のノート



※B児のノートより

研究内容3 指導・援助の工夫

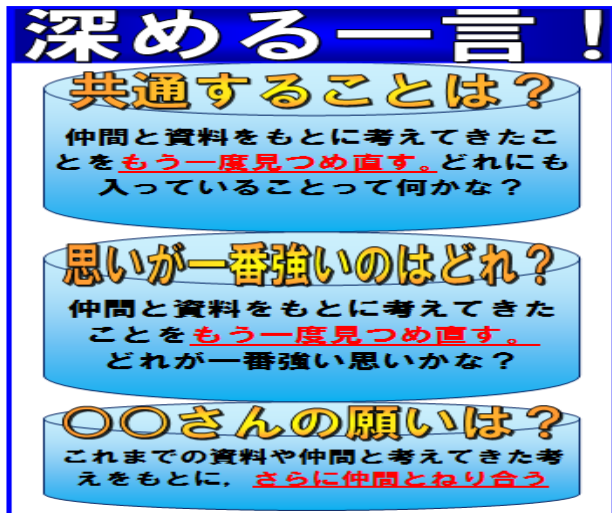
①社会とのつながりに気付く「3つの見届け」

子どもたちが主体的に学びを深め、新たな認識を得るためには、子どもたち自らが授業を深めていく学び方を身に付ける必要がある。本校では、【図表-3】のSTEP1やSTEP2の授業において、子どもたち自身が考えを深められるような学び方を指導している。

交流前半では、次ページの【図表-4】のように、資料から分かる事実を基に、課題に対する自分の考

えを話し合う。交流後半では、意見を集約した板書を見ながら、子ども自らが様々な立場や意見の共通点や中心点に着目し、事象の意味を考える学び方を、日常的に指導している。これらの指導により、自分たちで話し合いを深められるようにしている。

【図表－４】考えを深める学び方の視点



—第6学年「江戸幕府の政治と安定」の実践—

本単元では、徳川家光が行った江戸幕府の支配体制を強化するための政策について学習した。そして、キリスト教徒の弾圧として、家光が島原・天草一揆の鎮圧に12万もの兵を送った理由について考えた。

以下の【事例－7】は、【図表－4】の学び方から、考えの順序性を問う投げかけによって生まれた、学びの深まりである。

【事例－7】学び方を使った子どもの深めの発問

C1：「資料から、家光は人々がキリスト教を信じ、全然幕府のことを聞かなくなるといけないと思っていたと考えました。だから、そんなキリスト教徒の起こしたこの乱を12万もの兵を送って、おさえようとしたんだと思います。」

T：キーワードを板書

C2：「2つの資料から、『これ以上キリスト教徒の勢いをつけたくない』ことと、『広がるのを防ぎ、幕府に反抗できないようにしたい』という2つのことを考えました。みんなは、徳川家光はどちらの思いの方が強かったと思いますか？」

C3：「私は、キリスト教の教えを広めたくないという方が強かったと思います。それは、参勤交代や五人組といった制度をつくっていたのに、その意味がなくなってしまうからです。」

このように、全体交流での追究を通して、徳川家光の考えの順序性を考えることで、「キリスト教の教えの広まりを抑え、幕府の支配体制をさらに強固にしたい」という願いに気付くことができた。

②学習環境の工夫

子どもたちが社会とのつながりを感じる授業にしていくためには、社会の構成員として実際に社会で働く人々とのつながりを感じさせることが大切である。そこで、学習内容や発達段階に応じて、可能な限り、見学を位置付けたり、ゲストティーチャー（以下GT）として来校していただいたりして（TV電話を含む）、話を直接聞くことを大切にしている。

【事例－8】本校でのGTの例

	単元	GT
3年	スーパーマーケットで働く人の家の仕事	P店ではたらくM店長 にんじん農家のTさん
	各務原市のうつりかわり	市民公園建設の中心となったSさん 市の行政を担うA市長
	ごみのしよ理と利用 自然災害から人々を守る活動	各務原市環境課Nさん 各務原市防災課Aさん
5年	山地のくらし	山地で農業を営むKさん
	情報を活用して発展する産業	S店ではたらくO店長 M店ではたらくY店長
6年	新しい日本、平和な日本へ	東京オリンピックを招致した父をもつTさん



授業の中では、終末に検証として話をしていただけでなく、次の【図表－5】のような場で話をさせていただくことを大切にし、子どもたちと共に社会に見られる課題等について考えていただいた。

【図表－5】GTの出場と意図

GTの出場	意図
課題をつくる	・話を聞くことで、課題意識を強める。 ・GTに考えを伝えるという目的意識をもつ。
展開の後半	・GTの立場ならではの意見を話していただき、様々な立場から見つめ直す。
終末	・授業の課題に対する検証。価値付け。 ・自分の考えによって、よりよい社会が築けるかもしれないという期待感をもつ。

—第3学年「店ではたらく人」の実践—

単元終末では、学習課題を「誰もが来てくれるP各務原店にするためには、どうしたらよいだらう」と設定した。全体交流の後半、P各務原店の改善案についての発言を分類し7つに整理したところで、【事例－7】のように、M店長（GT）の話を位置付け、P各務原店の改善案について、様々な立場から考えることができるような投げかけをしていただいた。

【事例－7】立場を明確にする考えを促すGTの投げかけ


T1：たくさんの意見を考えることができたね。きっとMさんも、P店がもっとよりよくなる意見をもらって、喜んでいるんじゃないかな。Mさんに聞いてみよう。

GT：「たくさんの意見を出してくれてありがとう。でも、この全てを取り入れていくと、P店の願いが実現できなくなってしまいます。みんなの願いも、P店の願いも入れて、考えてくれるとうれしいです。」

T2：P店の願いを入れてほしいとMさんは言っていたね。P店の願いの「値段に合ったよい商品」、「すべてのお客さんが買いやすいお店」^①を入れて、考えていこう。

C1：Mさんにやってもらえそうなことは、商品の種類を増やすことと、商品が高いところにあっても、ぼくたちが届くように、踏み台を置いてほしいことと、商品をたくさんおくこと^②です。

C2：やってもらえそうなことで、踏み台を置くことは賛成です。でも、商品を増やして置くことは反対です。P店では、だれもが利用しやすいお店にすることを大切にしていたから^③、もし、お年寄りが、（商品の）真ん中の物をとったら、品物がくずれて大変なことになってしまうからです。



P各務原店の改善案について、あいまいな立場で考えていた子どもたちは、GTとT2の発問を受けて、自分たちの考えを見つめ直した。そして、C1②のように、「自分がお客さんだったら」と想定しての意見を考えることができた。さらにC2③のように、P各務原店が誰もが利用しやすいお店を目指していたことを関連させ、高齢者の立場からの考えももつことができた。

6 成果と課題（研究内容2を中心として）

【成果1】研究内容2に関わって

単元を通じた学習を進める中で、社会科で学んだことを、自分ごととして考えたり、関わりをもったりする姿が増えてきた。

第4学年の「ごみのしょ理と利用」の学習の後、「昨日、手伝いでごみを捨てに行ったら、ゴミがネットから出ていたよ。だからパッカー車の人が困ると思って、ネットをかけておいたよ。」と、話をする児童の姿が生まれた。このように、単元の学習を進める中で、学んだことを基に自分の生活を振り返る姿が、見られるようになった。このような姿が生まれたのは、【図表－3】のように、社会への関わり方を選択・判断する学習活動を多くの授業で実践したことによる結果である。

【成果2】研究内容3に関わって

仲間との学び合いを通して、自分の考えを深めていく姿が見られるようになった。

右の写真は、第3学年「お店ではたらく人」の学習である。子どもたちは、黒板の拡大資料や、手元の資料を仲間と共に



見合うことによって、対話しながら考えをもったり、深めたりすることができた。第3学年から第6学年までに発達段階に応じた学び方を丁寧に指導してきたことで、子どもたち自身が主体的に、学びを深めていく姿が見られるようになってきた。

【課題】研究内容2に関わって

社会科の学習と、社会と関わった経験を、さらにつなぎ、深い学びにしていきたい。

社会との関わり方を選択・判断するSTEP3の授業では、社会に見られる課題の解決について、既習事項や生活経験とつないで考える姿が弱い授業もあった。その要因は、STEP1, 2の授業が確実に位置付けていなかったり、丁寧な指導がなされていなかったりしたためである。今後はSTEP1, 2とSTEP3の学びを一体のものとした単元構想を考え、子どもが社会とつながる授業をさらに充実させていきたい。